

粟津温泉と温泉電軌



大正初期の粟津の温泉旅館(能登印刷出版部提供)



昭和8年(1933) 開設当時の粟津演舞場(個人蔵)

粟津温泉は、養老二年(七一八)に奈良時代の僧侶泰澄が夢中に白山妙理大権現のお告げを受け、開湯したと

伝えられる。泉質は芒硝(硫酸塩)泉、皮膚病・神経痛など効能も多く、明治十四年(一八八二)には、ドイツで開

催された万国衛生博覧会にも泉水が出品された。明治三十三年刊行の『粟津温泉案内』によると、当時旅館数は一



温泉電気軌道那谷寺駅(小松市立博物館提供)



粟津温泉案内(石川県立図書館所蔵)



粟津温泉駅を示す看板(大王寺所蔵)



相撲場 養老公園の谷間に大正13年(1924)作られた相撲場では、毎年8月28日全国大寄合相撲が開催された。昭和39年(1964)まで続く。

三、旅館各自が泉源を持ち、内湯を設けていることを特徴としていた。明治三十一年の北陸線開通を機に、建物の修築、庭園の補修を施し、施設を「文明的温泉場」に一大刷新したとも記している。

北陸線粟津駅は明治四十年に開設、続いて粟津軌道(馬車鉄道)が同四十四年に開通した。

さらに、大正二年(一九一三)、温泉電気軌道が設立され、粟津軌道は山中電軌、山代軌道、片山津軌道とともに、その経営の

もとに入った。大正三年には連絡線として粟津温泉―河南間が完成、大正五年には新粟津(北陸線粟津駅)―粟津温泉間が電化、大正十一年には、北陸線と粟津、山中、山代、片山津の各温泉を結ぶ路線の電化も完了した。これらにより大正期には浴客が年間一〇万人を超えることもあった。

温泉電軌は戦時中の昭和十八年(一九四三)、北陸鉄道に統合された。そして戦後のモータリゼーションの流れの中で、昭和三十七年、新粟津―宇和野間が、昭和四十六年には全線が廃止となった。

(山本吉次)